

第25回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生【ライブ版】

2023(令和5)年12月14日 会場 円徳寺

講題 :『教行信証』 信巻 善導 三心釈

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

こんにちは、12月の忙しい時に、ようこそ皆さんお集まり頂きました。今年もこれで終わりですね。どうでしたか。いい年でしたか。お元気な様で、何よりです。まあ、色んな事がありました、私も今年もね。ご本山の慶讃法要も勤まりましたし、家内が、浄土に帰って行きました。まあしかし、私達二人には親鸞聖人の教えがありましたのでね、半年間まあ、本当に何物にも代えがたい時間を頂きました。まあ、亡くなりましたけれども、どうもまだ、僕の中では亡くなってはわけじゃないみたいや。夜中に2時や4時ごろ起きてね、まあ、息しとるかどうか。それからまあ、トイレに起こしたりなんかしたもんですから、夜と昼と反対になっちゃって、今でも夜になると目が覚めちゃうんですね。まあまあ、起きてもしようがないと思って、寝るんですけども。まああの、家内は居なくなりましたが、まあ、寂しいという感じはあんまりありません。何と云うか、まあ、こういう時にも思うんですが、仏様になって聞いてくださってますから、だからまあ、仏さんに嘘付かんように、思うてしゃべらせてもらってる訳です。まあ、お元気で皆さん頑張ってくださいね。

今年の最後の講義ということになりますが、今は「信巻」の、いわゆる經典の引文が終わって、論書の引文になっているとこですね。そうすると、皆さん思いませんか、例えば、今まで勉強して来た「行巻」で言えば、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空、七祖でしたね。七祖の伝統ですね。「行巻」というのは、念仏の伝統ですから法の伝統やね。ですから親鸞聖人のところに念仏を伝えてくださった、法を伝えてくださった方、これが七人出ている訳ですね。ところが「信の巻」になりますと、まず最初に出て来るのは曇鸞大師でしょう。これ、どうしてでしょうか。そして今日読む善導大師ですね。「信巻」は、「行巻」の法ということから言えば、信、つまり私たちの信心ですから、私たちの問題、機の問題。わかりますね。機の問題を中心に展開して行くところになります。

そうすると、機のところになると、なぜか曇鸞から始まる。そういうことですね。そして、曇鸞、善

導、この二人が信心、機というところから言えば、親鸞聖人に重要な役割をしてくださった。こういうことになりますね。

ですから、なぜ曇鸞から始まるか。一つは、この前申し上げましたように、南無阿弥陀仏の法を頂いた機の方の問題を、七祖の中で初めて明確にしてくださった方が曇鸞大師だと、こう言いましたね。南無阿弥陀仏に帰依するという時には、この中にも念仏の教えを頂いた方がいらっしやる。それは、こちらから言えば五体投地して、仏様の前に頭を下げて「偉そうに生きて来たことが申し訳なかった」とこう言っ、「凡夫である、仏様に最初から背き続けていた者でありました」と、こう言っ頭を下げるしかない、その念仏による機の自覚を曇鸞大師が「不淳・不一・不相続」と、こう言われた。こうおっしゃった訳ですね。これは中々、曇鸞大師さすがですね。「不淳・不一・不相続」、三つで私達の凡夫であるということを確認に表明なされた。二つでもなく一つでもない、三つ。だから恐らくこれは、曇鸞大師は『大経』の仏者ですから、この後ろに隠れているのは多分、「至心・信樂・欲生」という『大経』の三信によって、自分の身を凡夫であると、こういうふうに表示して下さっている。これは直ぐにわかります。

そして、この間の復習になりますが、そういう「機の自覚」を持った者こそ「本願の正機」である。本願が成就したという姿である。ここはみなさんわかりますか。単純に言えばね、単純に言えば法蔵菩薩が五劫もかかって思惟して、兆載永劫に修行して、そして最後には、もういくら人間に仏教を伝えても結局、自分の都合のいいところしか受け取らない。だから、もうどうにもならないと。だから私が最後には信心にまで成って、みなさんの命として身を捨てて、みなさん一人ひとりが、気が付くまで、あなた方一人ひとりの命として私は兆載永劫に修行するんだと、こう宣言している訳です。そうすると、これはこっちからすると本願が頂けるか頂けないかは、凡夫に成りきるかどうか。すれ違ふもんね。私達はいつも、なんか自分が立派な者、いい者になろうと。この娑婆は全部そうです。能力があつて、立派な者に成ろう立派な者に成ろうと思うて生きとるような状況からすると、これ法蔵菩薩とすれ違ってしまふ。だから、お釈迦様は何とかして法蔵菩薩の御心と私達の衆生の方の心とが一つに成ること教えないとしようがない。それが『観経』ですね。お釈迦様の仕事になります。そうですね。

『大経』は、救う法、本願の道理を広く説いている。ところが、その法を私達のものに出来るか出来ないかは、これは私達のこっち側の問題になる。そのこっち側の問題にどうしてするかというのがお釈迦様のお仕事です。そやね、言っとることわかるでしょ。ここに来ると、みんなわからん顔しとるからいいのよ(笑)。丁寧に言わないとわからないでしょ。そうやけど道理からしてもそうや。法蔵菩薩がわからん奴の為に身を捨てると言ってるのに、こっち側はなんか知らん顔して、なんかこの世を生きて行けるでみたいな顔して生きて行ってる。それは、すれ違ふに決まっているわけで、それですれ違わないうにどうしてするか、それがお釈迦様のお仕事になるね。

特に三部経ということから言うと、今申し上げているように、『大経』は一切衆生を救う法を明らかにしている。『観経』はその法がどうしたら私達のものに成るかどうか。それがお釈迦様の大悲です。釈尊の大悲ですね。そこにお釈迦様のなんて言うか、本当の優しさが輝いている。だから、『観経』は今言った、つまり常識で考えてですよ、この間勉強したところは、「不淳・不一・不相続」これは出て来たね。そして、「至心に回向したまえり」と言う、あの本願の成就文が出て来ていたね。曇鸞のところではね。

「本願成就文」というのは、本願が届いたという訳です。なぜ届いたのか、これだけでは理由がわからん。「不淳・不一・不相続」と「本願成就文」と二つ並べているだけです。わかる人はわかるのです。わからん人はわからん(笑)。わかる人は今言ったように、これ何で凡夫、普通の常識からすると凡夫でどうにもならん言うて五体投地している人のところにどうして救いが実現するのかね。それはまったく意味不明、世間の常識で考えれば、それを明らかにして行くのが『観経』ということになります。

そして、この『観経』でも特に善導大師が大切にされる場所は「散善義」。ここまでは、これまでも

何度もお話をしましたように「定善十三観」が説かれる。「定善十三観」というのは、座禅を組んで止観行を、心を静かにして、そして、覺りの智慧を頂くという修行が説かれて行く。ところが、ここからは今度は何故かわかりません、お釈迦様が一生懸命「定善十三観」を説いても、韋提希がわからん顔していたのかもしれない。皆さんと同じように。まあ、居眠りはしなかったと思う（笑）。多分泣いていたと思うわ。だから、これはこれだけ千々に心が乱れている者に、心を一つにしなさいと言っても無理かと思われたのか、わかりません。全くわからない。ともかく、ここから先は、もういいと、仏教の修行は、その代わり真面目に生活をしなさいというふうに、この私達の生活の中で仏教を説こうとなさる。

だからここからは、「麁悪修善（はいあくしゅぜん）」こう言われる訳です。そやね、この世の中でやっぱりちゃんと生きて行くということが大事ですから。そうすると、出来るだけ悪いことをしないで、常識はずれなことをしないで、まあ、いい市民になる。こういうことですね。それで、「そうそう、その通り」とお釈迦様はおっしゃって、それならまず、至誠心を持ちなさい、真実心を持ちなさい。それから二つ目に、深く仏様の覺りにまで通じるような心を持ちなさい（深心）。そして三つ目に、生活の全部をあげて仏様の世界に帰って行くのだという心を生きていきなさい（回向発願心）。この三つの心が揃えば必ず浄土に生まれますから。こういうふうに「散善義」のところで説いて行きますね。

ここが『観経』の中でも核心だと読んだのが善導大師です。特に皆さんご存じのように、この深信積では、特に「二種深信」というものを開いて、凡夫のままで初めて仏様の大きな世界に目を開いたんだという感動を述べますね。ですから、『観経』でもこの「散善義」のところに核心があると、こういうふうに読んだのが善導大師です。そうですね。つまり、本願が実現するためには、私がさっき申し上げたように、こっち側（私）が凡夫に成りきるということがないと本願と相応しない。そやね。私達が凡夫だと教えるのが、お釈迦様の『観経』の核心なのだ読み取った訳です。素晴らしいと思いませんか。

それに対して「定善十三観」ね、座禅を組んで覺りを悟るといふところが大切だというのが聖道門です。前にもお話ししましたが、『観無量寿経』、「無量寿仏を観察する」という経典ですから、これは浄土教の経典であると同時に聖道門の人達もこの『観無量寿経』というのは大変大事な経典になっていく。だから比叡山にも法華三昧堂がある。そして念仏三昧堂とちゃんと廊下でつながってる。そんなふうに『観経』は中国で爆発的な人気を出した。そして、天台を開いた天台智顛、龍樹の弟子であった吉蔵、それから中国の聖道門ですけれども一番最初に浄土教を取り上げた慧遠という人、この三人の人たちはここ（散善義）よりもこの「定善十三観」の方、こっちが仏教の核心なんだと。まあ観察、止観行で覺りを悟れない凡夫のために、凡夫ということを自覚させて、あえて念仏しなさいと、こう教えるのは、念仏する者になってやがて菩提心をもって菩薩のように育ってくる、そのために方便として言うんであって、こっち（定善十三観）が本道だと言った人の方が数が多いわけです。同じ『観経』の註釈書を書いててもね。

ところが善導大師一人だけがここ（散善義）が核心だと、こう見た。それはさっき言ったように、本願がもし私たちに相応するとすれば、箱の蓋と箱の底のように、如来と衆生、別々です。しかしこれが合わさって箱という物になるわけで、曇鸞大師がそう書いている。だから相応というのは凡夫が凡夫のまんま凡夫になりきること。如来の大悲は本願として実現しているから、その本願と凡夫とが初めて相応するんだと。世親がそう言っているわけです。

「我依修多羅 眞実功德相 説願偈総持 与仏教相応」（『浄土論』東聖典135頁）
仏教と相応すると。そのためにはここ（散善義）が大事なんだと。こういうふうに善導大師一人がおっしゃった。

それに則って、今日皆さんと拝読するところ、曇鸞大師からいきなり善導大師になります（東聖典214頁、西215、島12ー58）。そして善導大師はどこが出てくるかという、「至誠心・深心・回向発願心」、この「三心釈（さんじんしゃく）」が出てくる。これはしかし、皆さん覚えておられますかね、「三不三信の誨（おしえ）、慇懃に」（東聖典206頁）と親鸞聖人が「正信偈」でおっしゃる。しかし「三

不三信の誨」はどこにも出てこない。だからこれまで「三不三信の誨」に注目した人もいなければ、宗祖が言っていないから何のことかようわからんという形で過ぎてきました。

しかし「信巻」見てごらん。「三不信」、それから今言う「至誠心・深心・回向発願心」。これは「三不三信」の機の方の問題でしょう。だから、こういう配列で親鸞聖人が引用しているというのは、ご自身が「三不三信」のところに立って、そして曇鸞の言う「不淳・不一・不相続」の身であり、『観経』で言えば善導大師が言う「至誠心・深心・回向発願心」をいただいた身であると。こういうふうに「三不三信の誨」によって、「信巻」は曇鸞と善導が出てきているとしか考えられない。そうですね。

だからどこにも書いてないのは親鸞の立脚地なんだと。そこが立っているとこなんだから、説明しなくてもよく読めばわかるでしょと、こう言ってるんです。よく読んでください、わかりますから。そうなるんだから。いきなり親鸞が思いついて曇鸞を出した、善導を出したって言うんじゃない。そうじゃなくて、「三不信」とこの「三心釈」が並べて出てくる。それが如来の覺りを頂く根拠だからです。そしてそれをきちっと押さえてくださっているのは、道綽の「三不三信」以外にあり得ない。だから「三不三信」が親鸞の立脚地なんだというふうに私が言うのは、『教行信証』をよく読めばそうなるって言ってるだけです。「信巻」を読めばすぐわかる。「信巻」は親鸞の立脚地の巻ですからね。だから引用の順番を見ればすぐにわかる、と思います。

いやあ、あの、いらんこと言うのやめときますか。いやあ、あの、「三不三信の誨」なんていうことを注目している人もいなければ、今まで言ったこともない。だから江戸時代の講録なんて誰も言っていないことを、まあそんなことよう言うなあと、こう言いますけども、そりゃ引用見たらそうなるって僕が言ってるんであって、親鸞聖人も言っていないことを言ってるんだからって言うふうに、まあ褒めてくださる人もいれば、反対に、「親鸞聖人が何も言っていないのに勝手なことを言うな」と言ってけなす人もおります。

えー、皆さん寝とるから、どっちでもいいと（笑）思うかもしれませんが、「信巻」を読めば、「三不三信」の機の方の問題をきちっと押さえて、そういう機に初めて仏様の覺りが実現するんだと言うのが「三一問答」ですから、「三一問答」の助走になさっているのは道綽の「三不三信」に依るんだというふうに思います。えー、「京都075の親鸞、親鸞」に電話して聞いてごらん（笑）。「そうそう」って言うから。まあまあ、勉強するっていうのはそういうことです。つまり勝手な意見を言ってるんじゃないで、どう見てもそうでしょうとなってるからね。「行巻」は七祖じゃないですか。なぜ「信巻」は曇鸞から始まって善導なんですか。それだけでももうわからんはずですよ、よく考えたら。しかも「三不信」と「三心釈」じゃないですか。何故ですかって聞かれたらどう言いますか。根拠は「三不三信」しかない。そうですね。だから、宗祖の立脚地だったんだと。こういうふうに申し上げているわけです。

それで皆さんと一緒に善導大師のところをこれぞ一と読むと、また、私と田畑先生の生きている時間が間に合わなくなるから、だから、まあせめて「至誠心釈」、一番最初のところをちゃんと読むと、後どういうふうに宗祖が読んだかということがわかるから、一番最初の「至誠心釈」のところだけを皆さんとちゃんと一回読んでみましょう。そうすると、後は、「ああ宗祖はそういう目で読んでおられるのか」、そして「大事なのは“二種深信、だな」と、こうわかりますから、まあそういうふうに進めていこうと思っています。

まず、今日の拝読するところを一回読んでみましょう。このあいだ拝読した。213、214ページのところは『論註』の「不淳・不一・不相続」のところです。それを受けて今度は「17 光明寺の『観経義』（定善義）に云わく」。ここからちょっと皆さん読んでみますか。

「光明寺の『観経義』（定善義）に云わく、「如意」と言うは二種あり。一つには衆生の意（こころ）のごとし、かの心念に随（したが）いてみなこれを度すべし。二つには弥陀の意（おんこころ）のごとし、五眼（ごげん）円（まどか）に照らし六通自在にして、機の度すべき者を観そなわして、一念の中（うち）に前なく後なく、心身等しく赴き、三輪開悟して、おのおの益すること同じからざるなり、と。已上」

(東聖典214頁、西215～、島12-58)

変な文章から引用しますね。これは『観経』の「雑想観」の、仏様の体っていうのは金色に輝いているでしょう。そして、仏様の身は金色ですから、智慧。ね。そして曇鸞の『論註』によると、身・口・意で言えば、身は金色で智慧。それから意(こころ)は本願、平等の本願を説いた。口には南無阿弥陀仏を称えた。これが仏様の身ですね。だから、「雑想観」のところにね、ああ、あんまり詳しく言うとまた、ああ、しかし言わんとわからんし、言うのと寝るしな(笑)。この聖典で申し上げると111ページな。111ページ開けましたか。これは「定善十三観」を説く中の最後です。最後の「雑想観」、十三観目ですが、そこに111ページの終わりから4行目のところに、

「阿弥陀仏、神通如意にして、十方の国において変現自在なり。あるいは大身を現じて虚空の中に満ち、あるいは小身を現じて丈六八尺なり。所現の形、みな真金色なり。」

(『観経』東聖典111頁、西107、島2-20)

こういう文章がある訳です。これはどういう文章かという、「阿弥陀仏は神通如意」と言うんですから、あらゆる形で人を救っていく、それが自由である。「十方の国において変現自在なり」。「あるときは大きな身を現じて虚空の中に満ち」と言うんですから、これはひょっとしたら「空の覚り」として阿弥陀仏がはたらき出ることがある。「あるいは小身を現じて」って言うんですから、わざわざ小さな身にして、「丈六八尺」っていうのは、これは丈六の阿弥陀仏や。平等院に座とろう、こうして阿弥陀さんが。あれ丈六の阿弥陀仏と言う。六尺あるのか。丈六って言うんですから、六丈か。あれ丈六の阿弥陀仏、大きいですよ。

いらんこと言わんでいいですけど、あれとおんなじ阿弥陀さんが親鸞聖人が生まれたという法界寺、京都市伏見区日野に親鸞聖人がお生まれになったという日野家の菩提寺として法界寺という寺がありますが、今でも行くと、平等院の仏さんと同じ仏さんが、平等院はまあ金があったんでしょう、大きな館ですけど、親鸞聖人のところは小さいのに頭がつきそうで、こうして入ってます、あれ丈六の阿弥陀仏やね。あれは私たちのような凡夫が空だとか涅槃とか言ってもわからんから、金色にして私に手を合わせなさいと言って、南無阿弥陀仏を称えてね、私との関係を回復しなさいと言うためにわざわざあんな大きな仏さんになって私たちのところに来てくださってる。そんなふうに、大きく言えば空であるとか涅槃であるとか言ってもいいし、小さく言えば私たちの凡夫のために、この阿弥陀さんにまでなって、ここまで来てくださっておるんだと。それは全ての人を救うためなんだという意味で、ここに「神通如意」と出てくるわけです。いいですね。

この「神通如意」について善導大師が註釈しているのが今読んだ文章です。さっきは阿弥陀さんのことばかり書いとったろうが。そうすると、この善導大師の文章になると妙なことを書いとるのよ。「如意というは二種ある」と。「一つは衆生の意(こころ)のごとし、かの心念に随(したが)いてみなこれを度すべし」。一つは私たちの心やと。私たちでも皆さんそれぞれ何をお思いになってるか私はわからんし、しかしお互いに仏教がわかりたい、救われたい、こう思うとる。しかしそれも自分の境遇によりますからね。まあいろんな境遇で私たちの方から「救われたい」という心、それを「如意」と言うんだと。もう一つは阿弥陀の智慧は完全円満して、そして無生法忍の覚りを我々に手渡す。それが自由自在だから「如意」と言ってるというふうに、善導大師はこの「如意」という言葉だけを取り上げて衆生の方からと、仏の方からと、この二つにわざわざ分けて言ってるというのがよくわかるでしょ。

もともと『観経』ではこれは仏さんの「神通如意」なんだから、仏さんの方だけ言えばいいわけです。ところが、善導大師は、いやそうやなくて仏さんの教えを受け取る私たちの問題があるんだと言って、衆生の方にこの視点に移している。これはおわかりですね。ですから、「信巻」は私たちの方、だから、善導大師のこういう註釈を持ってきて、ここから私たちのこと、「如意」と言っても二つあるのよ。「救う仏さん」と「救われる私たち」とあろうと。その救われる私たちの問題をこれから問題にするんですよと言うために、わざわざこういう文章をここに持ってきていると、こういうことになります。い

いですね。

それでその次に行きましょう。

「(序分義)また云わく、この五濁・五苦等は、六道に通じて受けて、未(いま)だ無き者はあらず、常にこれに逼悩(ひつう)す。もしこの苦を受けざる者は、すなわち凡数(ぼんじゅ)の撰(しょう)にあらざるなり、と。」

これもどういう意味かという、私たちのこの世は、『阿弥陀経』に言うように五濁にあふれている。

「劫濁 見濁 煩惱濁 衆生濁 命濁中、得阿耨多羅・」(東聖典133頁)というね。

「劫濁」というのは時代の濁り。テレビ見ても面白なかろう今、戦争のニュースばかりでもうイライラしてくるね。腹が立ってくる。時代全体がなんか大きなもので動いててね、私達個人の力ではどうにもならんようなものを感じる。時代全体が濁るとるとしか言いようがない。それが劫濁です。

「見濁」というのは、「見」というのは、これは思想です。私達一人ずつの考え方。ね、ああいう悲惨なニュースを見ると、もう僕はニュースを見るのがつらい。もうかなわん。病院に爆弾が落ちたとか、ね、しかしそれは時代の濁りであるけれども、私達一人ひとりの考え方が、「自分さえよければいいじゃないか」と、こういう考え方で動いている。だから、イスラエルにしロシアにし、戦争仕掛けた方が悪いと。まあ、あれはハマスが撃ったんだけどね。どっちにしても、自分たちがよければいいと思うて始まったわけで、喧嘩するのは喧嘩する両方とも言い分があるね、その言い分が深い自己執着に汚れている。自分さえよければいいという根性、それによって思想がなり立っている。それによって時代が濁るんだと。こういう意味で、「劫濁」「見濁」「煩惱濁」というのは今言った、その思想は全部煩惱に汚されとる。その煩惱の一番深いのは執着心ですから、全部「自分さえよければいい」と、こう言って、今のようない時代全体が起こっているのだと、お釈迦様はちゃんと教えてくださっている。

「劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁」。だから人間がぼろになっている。ね。もうどないなってるのやろうな。まあ年取ったせいかなあ。テレビを見とつても若い人が言うとはようわからん、私は。何か知らんけど、わがまま勝手なことばかり言って、自分のことしか言わんぞ。そして、段々段々「人間がぼろになってきている」。本当にそう思います。勉強するんでもね、本当、私がまだ大学に入ったころは、安居(あんご)といったら一か月でした。あの真夏の暑い時にね。クーラーなんかなかった。だから安居をやるのは、本講をやる先生はもうお年ですからね、まあ当時、私の先生でも70過ぎてやっておられましたから、あれ「安居で途中で倒れて死ぬ」という、その覚悟を持ってやりました。聞く方もその覚悟を持って聞いてましたから、それは一か月の講義を全部ノートに筆記しているのですよ。まあようやりますよ。皆さん2時間の講義でも寝ろが(笑)。それみなさんのせいじゃないのです。「人間がぼろになっている」としか言いようがない、もう。

そんなふうな、考え方も合理的になってくると、もう書くよりもテープ取りましょうと。テープ取らないで書いたやつを今度は携帯で撮りましょうなんてなってくると、段々段々ぼろになってきて、人間がぼろになってくる。煩惱濁、衆生濁、そして命さえ短くなっていく。やがて、命は6歳になっていくとか9歳になっていくとか、諸説ありますけれども、命は6歳か9歳になっていくとお釈迦様は説いている。その代わり長生きしとるぞ、今。どういうこっちゃ。

たぶん自我が発達してくるのは6歳か9歳でしょう。今僕はじっと見とるんだ。段々段々見とると、この間ぐらいで中学生がナイフで刺し殺そうとして刺しとったね。つまり、自我が確立していくと、段々段々自己主張が強くなって、やがて、6歳といえば小学校1年生ですよ。つまり小学校1年生で、人を殺したり自殺したりということが起こってくる。僕はそういうことを言っとるのじゃないかと思えます。

そんなふうな命が短くなってくる。「五濁」です。その苦。「五濁」、そして「五苦」。そういう苦しみを私たちは六道に通じて受けている。「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天」というふうな六道の世界をグルグル私たちは回ってますけども、誰一人として、この「五濁」・「五苦」の苦を受けない者はない。みんなこれを受けて苦悩するんだと。もし、この苦を受けないという人がいれば、それは凡夫ではない

と、こう書かれているわけですね。

ですから、善導大師の眼は、人間を見る眼はね、社会的に優れているとか、能力あるとか能力ないとか、身分が高いとか低いとかいうのではなくて、「凡夫である」。「どんな人も凡夫である」。こういう眼があるのだというのはわかりますね。こんなふうに、私たちの方から救われる「如意」というのは「凡夫をどう救うか」ということ。それに極まるのだということがこの二つの引文でよくわかると思います。わかりますね。僕が言ってるわけじゃなくて、そうなのだろうが。

わざわざ、しつこいようですが、「神通如意」という仏様の「如意」を取り上げて、善導大師は「いやいや、救う仏さんもおるかしらんけど、救われる私たちの問題があるのだ」と、こう言っというて、私達は凡夫以外にありえないと。だから、「凡夫をどう救うか」、これがお釈迦様の大悲なのだというふうに、この文章からわかっていくわけです。

そして、その次に進みますよ、いいですか。進まないで命がないですから。そのつぎは

「**散善義**」また云わく、「**何等為三**」(何らをか三となす)より下「**必生彼国**」に至るまで**已来**(このかた)は、**正**(まさ)しく**三心**(さんじん)を**弁上**(べんじょう)してもって**正因**とすることを明かす。**すなわちそれ二つあり。**」(東聖典214頁～、西216、島12-59)

この今言ったことわかりますか。これはね、『観経』の「散善義」を開けてごらん。112ページ。開けましたか。112ページの「雑想観」が終わって空白がちょっとありますね。その次から「散善義」が始まるんです。この「散善義」が始まる最初にね、私はさっき申しましたように、

「**仏、阿難および韋提希に告げたまわく、「上品上生」というは、もし衆生ありて、かの国に生まれんと願すれば、三種の心を発**(おこ)して**すなわち往生す。**」

(東聖典112頁、西108、島2-21)

ここから始まるわけです。ですからね、ここを註釈している善導大師からすると、「上品上生」というと、すごい優れた人でしょう。能力もあり、それから地位も高い、そういう人やね。そうではなくて、「一切衆生を救う」というのは、この「散善義」のお釈迦様の課題ですよというふうに押えているのが、さっきの文章よ。

「上品上生」から始まるから、だからここは、みんな「上品上生の人」に当てはまることをこれから言うんだと言っているけど、そうじゃないよと。「上品上生」から「下品下生」まで、全部凡夫でない人は一人もおらんのかから、その全部を救うために当てはまるのがこの「三心釈」なのよと。こういう意味なのです。善導大師が言っていることはね、わかるでしょう。

そこに、「**何等をか三つとする**」。これです。「何等をか三つとする」。そして、「**一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心なり。三心**(さんじん)を具すれば、**必ずかの国に生ず。**」

「**必生彼国**」。(東聖典112頁、西108、島2-21)

今のところね、今のところわかりますね。ですからちょっと善導大師の引文に戻しましょう。

「また云わく、「**何等為三**」より下「**必生彼国**」に至るまで」(東聖典214頁)、今読んだところ。「何らをか三となす」とお釈迦様が自分でおっしゃって、そして、それが揃えば必ずかの国に生れますよと、こういうふうにお釈迦様がおっしゃってくださった。

そこは「正しく三心を弁上してもって正因とすることを明かす」。当たり前やね。「至誠心、深心、回向発願心だとお釈迦様が聞いて、お釈迦様が答えている」。その三つを言って、そして、「お釈迦様が問うて、お釈迦様が答えているところよ」と。

そして「すなわちそれ二つあり」と言って、

「**一つには、世尊機に随**(したが)いて**益**(やく)を**顕**(あらわ)すこと」、この「顕」に○をつけてください。「世尊、お釈迦様が私達衆生の一人一人をみそなわして、利益を顕わす」。「顕」だね。あらわすという字は、「顕」だろう。

その下に「**意密にして知り難し**」。この「密」にも○をしてごらん。これが、「**顕彰隱密**」(けんしょうお

んみつ)のもとです。わかるね。

お釈迦様の説法は、お表向きにおっしゃってることと、それから、その表向きの言葉より深くて、「凡夫が知り難い密意がある」と。こういうわけです。そして、ここはお釈迦が自ら問うて、自ら答えたのだから、お釈迦様の「三心(さんじん)」というのは、お釈迦様が自ら聞いて、自ら答えたのだから(「**仏自ら聞いて自ら徴したまうにあらざは**」)、そして「**必ず浄土に生まれる**」とこう言っているのだから、私達にはその意味はわからんけど、「密意」がそこにある。だからそれによって、「**解**(さと)り」を**得るに由なきを明かす**。「私たちは覺りを頂くのだ」と、こう言っているわけです。どうですか。いいでしょう。言ってることは実にその通りじゃないですか。

「南無阿弥陀仏を称えなさい。それによって必ず救われます」。これが浄土教やね。表向きには「南無阿弥陀仏を称えなさい」ですよ。けど何で救われるのか、何で南無阿弥陀仏で凡夫が救われるのか。それは私たちの方からはわからんのだと。しかしこれは、仏の方がそう言っというのだから、仏様の方がそう言っというのだから、仏様によって救われるのだと。こういう文章になっているわけです。そこにやがて、親鸞聖人の教学の要になってくる「**顕彰隱密**」。わかりますね。凡夫の方からはわからんけども、お釈迦様の「救おう」という、そういう「密意」が後ろに隠れとるんだから。

もうちょっとはっきり言います。『観経』では、「至誠心・深心・回向発願心」。頑張んなさい、まじめにやんなさいと書かれている。だから私たちはそれに従って、表向きはまじめにやんなさいと書いてるんだから、真面目にやるしかない。ところがですよ、これは、僕はお釈迦さんじゃないから言うたらあかんけど、これまでお話ししたことから言えば、親鸞聖人や法然上人は、この南無阿弥陀仏の教えがこの身に突き刺さった時に、「**いずれの行もおよびがたき身**」(『歎異抄』第二章、東聖典627頁)と、こう言うたのだと。普通の常識だったら、一生懸命救われようと頑張ってるのに救われん。救われんともっと頑張らんとあかんと思うて、自分の努力が足りんからやと言って頑張る。しかしそれを10年もやっていると、やっと本願の教えが届いたと。その通り。人間はそもそも人間になった出発点から仏さんに背いとった。初めて「**いずれの行もおよびがたき身**」と、こう言ったんやね。

そうするとさ、これは僕お釈迦さんじゃないから言うたらあかんのやけど、人間にな、「ぼーっとしとらんと頑張れ!」と言ってるわけや。頑張って頑張って頑張って、頑張ったら必ずドツボにはまるから、自分で絶対に救われんというところまで行くから、「頑張んなさい」と言っというのに決まっというんだ。だけど、こっちからはわからんのだと。そういう深いお釈迦様の大悲がね。「念仏せい」とか、「まじめにやんなさい」とか、これどういう意味なのかよくわからん。けれどもお釈迦様は、深い覺りの智慧に立った方だから、表向きには『観経』は「自力を尽くして頑張んなさい、「**真実心**を持って頑張んなさい」と、これから出てくるわ。ね、そうと説かれているけど、裏向きでは、「必ず本願に目覚めるから」という「密意」がこもっている。それを善導大師は今こういう言い方で言ってるということになります。

いいですかね。少し先取りして、ちょっと解説になっちゃったけど、善導大師という人はやっぱり偉い人やろ。衆生の方に目を向けてね、そして私たちの方から言えばようわからんにしても、お釈迦様の大悲がそこに輝いとるのではないかと、こう言っというわけです。その意味をこれから問うていくことになります。そしてそれがね、曇鸞大師のところで、「不淳・不一・不相続」の人のところに本願が成就した。それどういうことや。どうなったら本願が成就するのか。その道筋が『観経』のこの「三心釈」のところに丁寧に説かれているから、今から引用しますよと。こういう形になっている。わかるでしょう、言っていることね。三人しか頷いていないけど、いいな(笑)。もうこれ以上丁寧に言えないぐらい丁寧に言うとするよ。わかりますね。これからこれを読んでいくともっとわかります。今度は親鸞聖人は偉い。ちょっと休憩しましょう。

講義 2

（「廃悪修善」の板書の「廃」の字は「病だれ」でなく「真だれ」、の指摘を受けて）あっそうか、大変失礼しました。ボケてますので…、まだボケとると言っても病だれぐらいでしょ（笑）。暁鳥敏（あけがらすはや）という人は、「あの人が～、あの人が～」言うてずっとしゃべるのやて。で、誰のことやろうと思ってよう聞いたらどうも親鸞聖人らしいんや。名前忘れとる（爆笑）。曾我さんもそうでした。90過ぎて「あの人が～、あの人が～」って言うのよ。何のこっちゃ思ったら親鸞聖人のことを「あの人が～、あの人が～」って言うとのよ。まっ、病だれじゃないそうです。失礼しました。

もう少し勉強しましょうね。難しいというか、お話を聞いている人は法話ではないために、ちょっと難しいというか、慣れないからね。しかしこれはやっぱり何度か言ったように、『教行信証』は学問の書ですから、あんまり崩さないで、法話にしてしまうとわかったようでわからん話になっちゃうから、正確に読んで正確にお話をした方がいいというふうに思っています。ですからまあ、ようわからんなど思う方はどうぞご遠慮なくお休みください（笑）。

これまで読んで、親鸞聖人の意図がよくおわかり頂けると思っています。善導大師の文章、なんか妙な文章を二つ、前に引いてね、しかしここからは「信巻」だから、仏様の「如意」と私たちの救われるという方の問題があるよと。こっちの方からこれから説いていきますからねと言うために、きちっとそれを立てているわけです。そして、お釈迦様がそういう意味からすると、私たちからはよくわからんということが多い、経典は、何を言うとかようわからんと。けども、そこにお釈迦様が自分で「何等をか三つとする」（『観経』）と言うといて、「至誠心、深心、回向発願心が揃えば必ず浄土に生まれますよ」とお釈迦様が答えてるんだから。だから、私たちがわからなくてもその通りにするしかしゃあないでしょうと。そしてその「密意」を私たちが頂かないとしょうがないですねと、こういうところまで（現在の講義は）来ているわけです。いいですね。そこまでね。問題ないでしょ。

だから親鸞聖人は実に準備周到にというか、私たちがわかるようにちゃんと引用しておられるというふうに思いますよ。『観経疏』というのはわかりますね。『観経四帖疏』といって相当厚い本ですよ。その中からポコッポコッと引用しているわけですね。だから、何と云うかなあ、まあ私たちにわからせるためにこういう文章をずっと引用してくるとするのは、僕らからすると親鸞という人は、あれは天才的だと思いますね。まっ、今のことを踏まえて少しでも先に進みましょう。

それでさっき（前半の講義で）印をつけて下さいというのは「顕彰隠密」（けんしょうおんみつ）。

「世尊機に随いて益を顕すこと」（東聖典215頁、西216、島12-59）

私たちの機に随って法を説いて下さっている。しかしそれは私たちからすると「意密にして知り難し」と。よくわからんのだと。ここに「顕彰隠密」と。『観経』はだから「顕彰隠密」ということが大事だということになります。そして今申しましたように、

「仏自ら問いて自ら懲したまうにあらずは、解（さと）りを得るに由なきを明かす。二つに、如来還りて自ら前の三心の数を答えたまうことを明かす。」これは、お釈迦様が「還りて」というのはお釈迦様の覚りをよく還って、よく還りみて、「至誠心、深心、回向発願心」と、この三つを私たちのために答えてくださったんですよ。こういう意味です。

そしてそこから、『経』に云わく、『観経』にこう言ってるでしょうと。まず、「一者至誠心」と、こう言っている。「至」は真なり。「誠」は実なり。真実。だから、まず初めに真実心を持ちなさいと『観経』は説かれている。

そして、「一切衆生の身・口・意業の所修の解行、必ず真実心の中（うち）に作（な）したまえるを須（もち）いることを明かさんと欲う。」この「須（もち）いる」というところに印を付けて下さい。これは「須

（すべから）く～すべし」という字です。そうですね。そしてこれは、ここは実は、善導大師の方は「須く真実心を持ちなさい」とこう読んどるところ。ところが親鸞聖人はこれを「須（もち）いる」と読んで、「須（すべから）く～すべし」と一切読まないんです。その後も、この215ページの終わりから5行目、ここにも「必ず真実心の中に捨てたまえるを須いよ。」と。その一つ後の行にも「みな真実を須いるがゆえに、」とこうあって、「須く～すべし」という字のはずなのに、親鸞聖人は「須（もち）いる」と読んで、そしてこの文章を全部読み替えている。こういうことになります。

少し勉強した人は、ここは有名なところですからご存知だと思いますが、ご存知でない方はご存知でないわけで（笑）、ですからまあ、善導大師の読み方を、この「至誠心」のところだけはちゃんと読みましようねと申しましたように、ここだけきちっと読めば後は全部そうなるから、同じようになっているので、ここはちょっと面倒かもしれませんが、善導大師がどう読んでたのかという文章をここに書いておきます。そして親鸞聖人がそれをどう読み替えたのかと。そこに、さっき言ったように『観経』から『大経』に、凡夫がどうして救われるかという理由が込められているということになりますので、重要な読み替えですから、ここで書いておきましょう。善導大師はね、今のところですが、僕は珍しく書いてきたんだぞ。最近「廃」の字を間違える程ボケとるんだから。昔はすらすらと言うとったんですけどね。

一切衆生の身口意業所修の解行は、必ず須く真実心の中に作すべきことを明かさんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして、悪性やめ難く、事蛇蠍に同じきは、三業を起すと雖（いえど）も名づけて雑毒の善となし、亦虚仮の行と名づく。

（『観経疏』散善義、西・『浄土真宗聖典・七祖篇』455頁）

そうです。善導大師はこんなふう読んでおられるわけですね。親鸞聖人という方はね、余程の学者でね、一字も変えることなく読み替えてね。意味を変えちゃうんですね。元々表向きの『観経』のお釈迦様の説法が言ってることは、一切衆生の身口意業によって修める行いは、

「必ず須く真実心の中に作すべきことを明かさんと欲す。」つまり、「一者至誠心」（『観経』）とお釈迦様が言ったのは、「皆さん、今日から全ての行いを真実の心でやってください」とこう言ってるんだと。これが善導大師の表向きの言い方です。「一者至誠心」というのは、「今日から真面目に生きよ」と、「真実心を持って生きなさい」とお釈迦様が言って下さった。そして、「外に賢善精進の相を現じ」というのは、わかりますね。私たちはすぐにええ格好して、外側で、賢善精進というのは、これが賢く、善く、精進とは努力しとると。だから、これ社会で一番評価される在り方です。「賢く善く一生懸命努力してるんですよという姿を現わして、内側には真実心を持って生きなさい、虚仮を懐いてはいけません。」こう言ってるわけです。わかりますね。

そして、「貪瞋邪偽」、「貪欲、瞋恚、愚痴」、そういう煩惱が一刻の猶予もなく起こってきて、悪いことばかりをして、ちょうど蛇や蠍（さそり）のように、私たちが身口意の三業で行動しようとしても全部「雑毒の善」となる。煩惱に汚れてるからね。また、そういうものは「虚仮の行」と言うんだと。だから「私たちがこういう貪瞋邪偽の根性でいくら浄土を求めても求められませんよ。人間の方から起す心はいつでも貪瞋邪偽の心で汚れてるから、真実心を持ちなさい。そして真実の心で仏教を求めなさい。姿も真実の姿を見せて、内に虚仮を懐いてはいけません。真実心で今日から生きていきなさい」と、こう説いてるのがお釈迦様の至誠心の説き方だと、こういうふうに善導大師がおっしゃっているわけです。これはよくわかるね。その通りやね。

ところが親鸞聖人は妙な読み方をしとるでしょ。親鸞聖人の方に目を移しましょうか。要するにお釈迦様は「真実に生きなさい」と。「あんたたちがやっとなる行動は全部煩惱に汚れるんだから、そんなもので浄土に行けるわけないでしょう」と。「真実の心を持ちなさい」と。こうおっしゃってるその文章を、「一切衆生の身・口・意業の所修の解行」、ここは一緒よ。こっから下ね。

「必ず真実心の中（うち）に作（な）したまえるを須（もち）いることを明かさんと欲う。」

(東聖典215頁、西216～、島12-59) こう読み替えてるわけです。「須く私たちに真実心を持ちなさい」とこう言ってるのを、そうではなくて、「法蔵菩薩が兆載永劫の中で真実心の中(うち)に修行をして下さったその真実心の中に、その法蔵菩薩の真実心を須(もち)いなさい」とこう言ってるんだと。わかりますね。

そして、さらに「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ」。私たちは外側に優れた立派な努力しているという姿なんて現わすことは無理です。何故なら、「内に虚仮を懐いて」、内心がいつも煩惱に汚されていて、「貪瞋邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、」 こう言ってるわけです。そうすると、お釈迦様は「外に賢善精進の相を現わして、内に邪な心を持ってはいけませんよ」とこう言ってるのに、親鸞聖人は、「私たちはそれできません」と。「外に賢善精進の相を現わすことは無理です」と。「何故なら内に煩惱をかかえているからです」と、こういうふう読み替えてしもうた。

そして、何よりも、ここ、「須(すべから)く真実心の中に作(な)すべきことを明かさん」。要するに、私たちに「真実心で生きていきなさい」とこう言ってるのに、「法蔵菩薩のご苦勞の中の真実心を〴〵須(もちい)る」と、この字(「須」)を全部ここでは「もちいる」と読みます。そして、「お釈迦様は表向きには私たちに〴〵真実心を持って頑張んなさい」とこう言ってくださるとるんだけど、それは、その教えによって私は、法蔵菩薩の真実心を須(もちい)る、頂く、こうなったんです」というふうに、善導大師は『観経』の「顕の義」、表向きの意味を明かにして下さった。それに対して親鸞聖人は『大経』に立って、『大経』の本願に救われた者として読み替えた。だから、『観経』の「しっかり頑張んなさい、真実心を持ちなさい」と言ってるのに、「いやいや、法蔵菩薩が顕かにして下さった真実心を須(もちい)る外にないでしょう」と。「何故なら外に賢善精進の相なんか出すことはできません。内が煩惱にまみれてるんですから」と。こういうふうに親鸞聖人は『大経』に立って、『大経』の本願に救われた者として、この善導大師の文章を読み替えていると。こういうふうになっているのをわかってもらえますね。

これねえ、やっぱり、なかなかねえ、もう字を間違う位ボケてますから、なかなか難しいと思いますが。ここに、さっき言った「顕の義」。「顕の義」というのは表向きに。表向きにお釈迦様は私達に「真実心を持ちなさい」と、こう言ってくれていると。ところがやっごらんと、ね。「この次までに皆さん真実心を持って生きて下さい」とこう申し上げると、この次ほとんど来ないと思います(笑)。いや、ほんとほんと、ね。もうろくなことを考えてないんですから。だから、その「真実心を持ちなさい」というお釈迦様の教えは、「やっごらん」と。「真実心が無いっちゃうことがわかったでしょう」と。こういうところまで教えてくださって、そうなった時に「初めて法蔵菩薩の本願と相応するから、初めて本願の真実心で生きる者になったんです」と、親鸞聖人はそう言ってることになります。わかりますね。

これ凄い読み替えやと思いませんか。そこに「顕彰隠密」ということがあるんですよ。『観経』は表向きには私達に、私達の方の心を見て、「しっかり頑張んなさい、真実心を持ちなさい」と、こういうふうに説いてくださっているけども、本当はそれによって、できないということを教えて、そして初めて法蔵菩薩の本願と相応するところまで導いてくださってる。「それがお釈迦様の『観経』の〴〵顕の義、です」と。裏から言えば、出来ないということを通して、初めて法蔵菩薩が「でしょう」と、「だから私が苦勞しとるでしょう」と。「初めて法蔵菩薩の本願に相応したんです」と。だから、「本願の真実心に拠って生きる者が変わっていくんです」と。申し上げていることわかりますね。

ここに「顕彰隠密」。表向きと裏向きの、「表向きは〴〵しっかり頑張んなさい」と、こう言ってくださるとるけども、裏から言えば、〴〵それに拠って本願に相応しなさい」と、こう教えてくださってる。そこに「隠密」ということがあるんですよ。「善導大師は〴〵顕の意味でこういうふう説いてくださってますが、わたくし親鸞は、本願に救われた者として、今度は〴〵密、の方からこれを読むと、こう読

めるんです。」と、こういうふうにして提示して下さった。どうですか。偉かろうが。ほんまに中津中走って回る位、感動せなあかんのやぞ。もうこれは偉い。これはやっぱり親鸞ちゅう人は。凄い凄い。

そこによーくよく考えると、その、「なぜ凡夫のまま救われるか」という道筋がちゃんと立てられてる。お釈迦様が、「しっかり頑張んなさい、真実心を持ちなさい」と、こう言ってくださってね、そして私達を導くために一生懸命頑張った。善導大師も頑張った。それから、わかりやすいのは清澤満之という人がやっぱりそのまま実験した。そして、一生懸命自分の人生を真面目に生きようとしたけれども、「何が幸福だやら、何が不幸だやら、何が真実だやら、何が不真実だやら」、まだいっぱいありますよ。「一切知り分る能力の無い者」と、清澤満之が言うのです。「一切知り分る能力の無い者」と言った途端に、「ほらね、法蔵菩薩の本願の中にあるでしょう」と。こういうふう本願の方から捨てない。「私達が凡夫に帰ってきた時に、初めて法蔵菩薩の本願の中にあつたということがわかるんだ」と。そんなふうに「凡夫に帰る」ということがなければ、法蔵菩薩の本願なんてお話になっちゃうから、ね。何のこっちゃわからんのだと。それを、善導大師の『観経』の註釈を通しながら、親鸞聖人は『大経』の方からここを読み替えて、そんなふう読んでくださってる。こういうことになるわけです。

偉かろう。何度も言うように。僕が偉いんじゃないぞ、親鸞聖人ちゅう人は、まあ、それりゃあ偉い。そして、こういう読み替えをよくよく勉強することによって、なるほど、あの曇鸞のところでは「不淳・不一・不相続」と「本願成就文」と二つしかない。これどういうふうな事情によって本願が成就するのかがわからんと。

ところが、この『観経』の「至誠心・深心・回向発願心」という、この三心のところでは、今申し上げたように、丁寧に善導大師がおっしゃってくださるとる。善導大師がおっしゃってくださるとることは「顕の義」だから、表向きの意義をおっしゃってくださる。「それに拠って私は救われたんだ」と。だから「本願の方から読むと法蔵菩薩の真実心を須(もち)いるようになったんだ」と。だから、私達の貪瞋邪偽(とんじんじゃぎ)、これはおっしゃる通り三業は全部「雑毒の善、虚仮の行」、本願しか法蔵菩薩の浄土には生まれえない。ね。「人間のどんなに素晴らしい良心であろうと、どんなに素晴らしい優れた心であろうと、人間心では浄土には生まれませんよ。本願に遇って、本願に遇うこと。本願によって初めて浄土が開かれていくんだ」という仔細を、親鸞聖人はこういう読み替えによって、私達に伝えてるというふうに思います。あの人は偉い。

それで、その後ね、「雑毒の善」と名づく。」その後ね、「この雑毒の行を」、いいですか、どこを読んでもかわかりますか。(東聖典215頁5行目から)

「内に虚仮を懐(いた)いて、貪瞋邪偽、奸詐百端(かんさももはし)にして、悪性侵(や)め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「真実の業」と名づけざるなり。もしかくのごとき安心・起行を作(な)すは、たとひ身心を苦励(くれい)して、日夜十二時、急に走(もと)め急に作(な)して頭燃を灸(はら)うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。」わかりますね。そして、

「この雑毒の行を回(めぐら)して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中(うち)に作(な)したまいしに由つたり、と。おおよそ施したまうところ趣求をなす、またみな真実なり。また真実に二種あり。一つには自利真実、二つには利他真実なり。」

ここまでして、ここで善導大師の文章を少し「乃至(ないし)している。「乃至」というのはわかりますね。割愛している。そして、後ろの文章とひっつけて、そこも読みますよ。

「不善の三業、我々の「不善の三業は、必ず真実心の中(うち)に捨てたまえるを須(もち)いよ。」ここも「須(すべから)く」、元々は…、ここも書きますか、折角ですから。

不善の三業は、必ず須(すべから)く真実心の中に捨つべし。また若し善の三業を起さば、必ず須く真実心の中に作(な)すべし。内外明聞を簡(えら)ばず。皆須く真実なるべし。故に至誠心と名づく。

『観経疏』散善義、西・『浄土真宗聖典・七祖篇』456～457頁)

こういうふうに善導大師は、ここを読むんですね。「不善の三業」、私達の毎日の生活の中で、「身・口・意」、身と心と口。しょうもないことを言うでしょう。「しもたあ、あんなこと言わなよかった」と。僕は毎日のように思います。特に酒飲んでやらかしますから。もう人の前で酒は飲まんこと。ろくなことはない。もう本当にやらかす。

「不善の三業は必ず須く真実心の中に捨てなさい」。わかりますね。「不善の三業は真実心の中に」、この「真実心」というのは、その前に、「法蔵菩薩の真実心」と、善導大師も言ってますから、だから「私達の不善の三業は、必ず須く法蔵菩薩の真実心の中に捨ててしまいなさい」と、こう言っとる。そして、「またもし善の三業を起こしたならば、必ず須く真実心の中に作すべし」。もし、善の三業をもし起こすということがあったら、それは法蔵菩薩の真実心の中に作したことによりなさい。

「内外明闇を簡(えら)ばず」。内側とか外側とか、それを簡ばない。凡夫だから。「皆須く真実なるべし」。「真実になんない。だからお釈迦様は、まず第一に「至誠心」と説いて下さったのであります」と。これが善導大師の読み方になります。しかし、善導大師の読み方も、これずっと読むと、さっき申し上げたように、「私達の「雑毒の善」である」と、こう言ってね、そして「この雑毒の行を回(めぐら)して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり」と。善導大師はやっぱ偉いでしょう。

そして、「何をもっての」、どうしてかと言うと、「正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中に作したまいしに由ってなり、と。」

法蔵菩薩が真実を行じてくださったからだ。

「おおよそ施したまうところ趣求をなす、またみな真実なり。また真実に二種あり。一つには自利真実、二つには利他真実なり。」と言って「乃至」して、そして、ここです。

「不善の三業は、必ず須く真実心の中に捨つべし」(善導大師)と、こうあるところを「不善の三業は、必ず真実心の中(うち)に捨てたまえるを須(もち)いよ」(親鸞聖人)と。「不善の三業は、法蔵菩薩が修行の時に、真実心の中に捨ててしまうんだ」と。「だから、法蔵菩薩のご苦勞、それを頂いて、私達は法蔵菩薩の本願に生きる者になりましょう」。こう言ってることになりませぬ。

「またもし善の三業を起こさば、必ず真実心の中(うち)に作(な)したまいしを須(もち)いて」、ここも一緒です。「もし善の三業」、みなさんが朝夕、南無阿弥陀仏を称えとる。これは善の三業としか言いようがない。南無阿弥陀仏を称えるというようなことが起こった時には、ね、「善の三業が、もし起こしたならば、必ず真実心の中に作したまいしを須いなさい」。念仏が、何か人生うまいこといくようにとか、ああ何か気分がいい時は、ああ何かお蔭で生かされとるとか、いろいろ思うね。そりゃあ思うていいんよ。思うていいけど、しかし、南無阿弥陀仏というのは、そもそも私達凡夫であるという者を総べて救うために、法蔵菩薩が真実心の中に、自分の身を捨ててしまうんだと。その真実心を受けて、南無阿弥陀仏ということをおし身になりませぬ。

ですからここも、「須く何々すべし」というところを全部「須(もち)いる」、「須(もち)いる」と読んで、法蔵菩薩のご苦勞、それを頂くんだというふうに、親鸞聖人が読み直している。

「内外・明闇を簡(えら)ばず、みな真実を須(もち)いるがゆえに、「至誠心」と名づく。」

ここまでが「至誠心釈」の最後ですね。見事でしょ。善導大師のお書きになったもの。しかも善導大師の意思と違ってないよね。善導大師も最後には「法蔵菩薩が苦勞して、真実の中に自分の身を捨てたんだ」と。だから、私達の不善の業は、「私達の身口意の不善の業は、どんなに立派でも、浄土に生まれるということはないんだ」ということをおっしゃってますから、親鸞と違ったことを言ってる訳じゃない訳です。ただお立場として、親鸞が本願に救われた者、『大経』の立場から、「必ず法蔵菩薩の真実心を受(もち)いなさい。私達のどんなに素晴らしい根性で仏教を勉強しても、そんなもので浄土に生まれる訳ではありません。本願に由りなさい」と、こう言ってるわけです。わかりますね。実に明確だと思ひます。

これはしかし、結構きついことを言ってるのよ。うーん。いつか私が申し上げましたように、平野さんの、平野修先生の13回忌に金沢に記念講演に行った時に、沢山の人が来てました。まあ、精神状態が悪そうな奴も来とった。ここは皆さん健康そうで、明るい顔してよくお休みになっておりますけども(笑)。この一、中には青い顔して、何だか僕が昔うつ病で苦しんどった時と同じような人が来とった。僕は実は昔、まあ名前を出していいかどうかわかりませんが、大学院に入った直ぐ位の時に、富山に吉田龍象(よしだりゅうしょう)という人がいました。この人は割と有名な人で、この何というか、九州工大を出ましてね、九州工大で仏教に触れて、そして一人で富山の城端(じょうはな)という所に道場を開いて、そしてそこで、子どもが13人位おったかな。だから、まあバカタレです。要するに、食うことなんか考えてなくて、仏教に生きて行った吉田龍象という有名な人がおりました。

皆さんご存知の、あのほら、福光に疎開しとった棟方志功や。棟方志功が、その吉田龍象氏の道場で、いつも曾我量深の話を聞いてとったんや。そしたら、まあいろんな話があるんですけど、例えば、いつかも話したかもしませんが、興奮して感動して、「宿業」ということを言うのと。「宿業本能」と言うのと。「そうや!」と。人間の一番ぎりぎりのところは、曾我量深が言う「宿業本能」、「煩惱の塊」と言ってもいいし、その「煩惱の塊」というところに法蔵菩薩がおるんや」と。「その通りや!」言うて、「ちょっとおい!墨汁買って来いー!」言うて箒でばあつーと、道場中、字を書いとる。ありゃ今何千万かするでしょうね(笑)。僕のような、ようわからん奴が見ると。

私はその道場にも行ったことがありますね、それで有名な人だったから、ちょっと食って掛かって、生意気でしたけどね。「俺を助けてくれ」と。「俺はわからんや」と、「仏教が」。「あんた仏教がわかってるんやったら、わからん俺をわからしてくれ!」と。「そうでないとお前なんか信じない!」。若い若い僕なんかそんなこと言うもんだから、吉田龍象はその頃70位でした。なかなかクソジジイでね。酒飲んでた酒を僕にバアーツと掛けて、コップ、バーン!と投げつけて、頭にカーン!と当たって、「お前みたいな小賢しい奴に仏教なんてわかってたまるかー!」と言って怒鳴りつけられたことがあったんです。その日からずっと吉田龍象を恨んでました(笑)。あいつは許せんと思うて。いや、そんなことがあったわけです。

そこで気が付かなあかんのや、な。どんだけわからないとか、どんだけ頑張ろうと、人間心です。どんだけ頑張ってもね。その人間心で、浄土に行ける訳ないと言って、コップ投げつけとるんだから、「その通りであります」と頭下げなあかんのに、「クソジジイ殺したるぞ」と思うて(笑)、思いましたが、そんなことがありました。後で考えると、今言った通りやね。勉強していくとその通りや。人間心で救われるわけない。どんなに真面目であろうと、どんなに純粋であろうと。

だからいつか言ったように、金沢でお話した時に、真っ青な顔をして、何かもう、ほとんど病気の人が手を挙げて立ち上がって、「先生助けてくださーい!」と叫ぶわけよ。「もうちょっと僕はスカッと生きたいんですー。僕は僕の人生だから、僕らしく生きたいんです。もっと、もっともっと明るく元気で生きて行きたいんですー!」と言って叫んで泣くわけです。「スカッとしたいんやったら、お前コーラ飲んでけ!」(笑)と。ハッ、何ちゆうことを言うんやとみんな思うたと思ひますよ。「ほいで何や、お前もう一回言うてみ。えー、もうちょっと明るく生きたいんやな。元気に生きたいんやな。自分らしく生きたいんやな。」「はい!」と言うから、「おー、それみんなお前の欲じゃ。お前の欲で浄土なんかわかる訳ねえ。」そしたら、へなへなへなと座ったから、後で自殺してなかったらいいけどなーと、大分思ひましたけど、死んだて聞いてないから、多分生きとると思ひます。けど、僕のことをきくと恨んどるでしょうね。

どっかでわかるて。ちゃんと言うとる親鸞聖人が。「うん、もうちょっと、もうちょっと。もう、もうちょっと。それぞれ、その通り。その通りのことを救うよ」と、法蔵菩薩が言うてる。「あなたのいのちは何も文句言うてない!法蔵菩薩の本願は、いのちとしてそこに生きとるじゃないか。それがわからんか!」と言いたいんやけど、そこまで言うと、まああかんと思うて、今のように言ったのは、こういう

ことを読むとよくわかるでしょ。「どんなに素晴らしい心であっても、人間の心は、三業の所修は雑毒の善、虚仮の行だ」と。「そんなもので浄土に生まれる訳がない」と、ちゃんと言っとるんだから。僕が言っとるんじゃない。だから、言い方は悪いけど、今現実的に言うと、そういうことを言ってるということになるので、結構きついことを言ってる。ね。だけど、それが本当のことです。うん、それに触れないと本当に救われるっちゃうことが実現しない。理解になる。と、思います。

今日はね、善導大師の「至誠心積」一つ読みました。ここに「須(すべから)く何々すべし」という言葉を全部「須(もち)いる」と読んで、「法蔵菩薩の本願の真実を須(もち)いる」と読みました。この後、「深信積」も「回向発願心」も全部そうです。そういうふうに読んでること。それをよく知っておいてください。そして、できたらその辺、今度読んで来て、ちょっと。勉強して来て。勉強せとは言わん。文章だけ読んで来て。「あーそやそや、須(すべから)く、須(もち)いると読んどる」と。そして「そう読んだらどう意味が違うんかなあ」位はちょっと考えて来て。これと同じ意味になってる訳です。そこにまあ、「親鸞聖人の実に素晴らしい読み替え」と、それから、「なぜ凡夫のまま救われるかというその道筋」がね、ちゃんと想像できるように読み替えてくださっていると、こういうことになります。ちょうど時間となりました。1

質疑応答

田畑先生..先生、質問の時間でよろしいでしょうか。

先生..はい、結構です。何でもいいですよ。

田畑先生..30分質問の時間を頂きたいと思います。どなたか質問のある方は挙手をお願い致します。

先生..この辺は難しいですから質問のしようがないですかね。というか、僕の解説が完璧だったですね(笑)。そのどっちかでしょう。どうぞどうぞ、何でもご遠慮なく。

質問者 1..今日は詳しいご説明ありがとうございました。それで、「顕彰隠密」ということが、善導大師の散善義の中にすでに、「益(やく)を顕(あらわ)すこと、意密にして」(東聖典215頁、西216、島12-59)、『観経疏』散善義、西・浄土真宗聖典七祖篇455頁)という、顕と密というのがあるというのは初めて気が付きました。知らなかった。「顕彰隠密」っていうことは、親鸞聖人が考えられた造語かなと思って。

先生..そうです。お言葉は、「顕彰隠密」という言葉は親鸞聖人がそういう形で言うのですけれども、もともとは二尊教、釈尊と阿弥陀という二尊教を説いたのが善導大師ですね。そうするとお釈迦様は阿弥陀について説いている。ところがここには阿弥陀ということが全然出て来ない、『観経』のところでは。至誠心・深心・回向発願心を須(もち)いなさいと書いてるだけで阿弥陀ということが出て来ない。しかし、「阿弥陀の本願に救われなさい」ということが密意として隠れている。そういう意味で善導大師がこの「隠密」という言葉を使って言っているわけです。この文章だけではなくて、他にもこの「顕彰隠密」ということの意味を先取りして言ったのは善導大師です。それを頂いて自分の方法論として三経を見たのは親鸞聖人が初めてだと思います。

親鸞聖人が初めてですけれども、言っている意味は善導大師が何度も言っています。この文章だけで

はありません。まだ他にもあります。それはなぜかと言うと、二尊教として説くから、どうしてもお釈迦様の説法は、密意は阿弥陀を説いているんですよと言わなければならないから、二尊教として説いたから、善導大師はどうしても「隠顕」ということを言わなければならないから、だからここだけではなくて、善導大師の文章の中には「隠顕」を言っているということが何度も出てきます。宗祖はそれを全部知っていて、自分の方法論として三経を見る時に「隠顕」という形で見たわけです。ですから、方法論としては善導大師に頂いたと考えてもいいです。

逆に言えば親鸞聖人が勝手なことを言ってるんじゃないということ。だから七祖の教えによって私は『教行信証』を書くのだと、こうおっしゃっているわけです。

質問者 1..はい。そういたしましたら、ここ、善導がすでに「益(やく)を顕(あらわ)すこと、意密にして」と言ってるということは、そして「これかならず不可なり」(東聖典215頁)と言ってるということは、すでに善導大師はもう、何と言いますか『大経』の心がすごくわかっている。

先生..当然です。当然。善導大師も『大経』の救いに立って『観経』の註釈をしているわけです。ですから私が何度も言うように、例えば、今度二種深信が出てくるけども、あの二種深信でも機の深信のところでは、(東聖典215頁、西217～、島12-59～)

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来(このかた)、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は

かの阿弥陀仏の四十八願というのは、『大経』に説かれている法蔵菩薩の四十八願はと、指示しているわけです。なぜなら『大経』の他に本願を説いている経典はありますか。『観経』と言えども本願がない。『観経』は本願を説いていませんよ。だから救われた韋提希は、「私は仏力によるのだと叫んでいますが、何度も。仏力ということはお釈迦様の説法で救われたのだと。こういうことを言ってるわけです。

『観経』には本願が説かれてないし、『阿弥陀経』にも本願が説かれてないわけです。だから「かの阿弥陀仏の四十八願」というのは、『大経』の阿弥陀仏の四十八願は、経典に説かれているけれども、それが今私のいのちとしてはたらいっている。そして誰もその本願から漏れる人は一人もいない。

「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮(おもんばか)りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。

これが法の深信ですね。そうすると法の深信のところでもちゃんと善導大師が「かの阿弥陀仏の四十八願は」というふうに指定しているでしょう。

それから法然が回心したと、「一心専念弥陀名号」、あれも最後は「かの仏願に順ずるがゆえに」(東聖典217頁、西220～、島12-61)と書いているでしょう。本願に救われるから、念仏を称えなさい、なぜなら四十八の本願に救われるからですよと、ちゃんと書いてある。

だから善導大師は『観経』の註釈をもちろん丁寧になさったけれども、いつも言うように、救いは本願の救いしかないんですよ。あたかも『観経』に救いがあるがごとく、『阿弥陀経』に救いがあるがごとく言うけどね。確かにあります『観経』の救いは摂取不捨と、こう言われる。しかし、阿弥陀に救われたというところに立って『観経』を見るとね、『観経』は孤独に沈んで、家族でも最後には殺し合いになるんだと。そして一人で泣きわめいている韋提希に「一人じゃない」と、「大きな大悲の中に目覚めなさい」と。「仏さまの大きな大悲に目覚めたら、たくさんの人と生かされているじゃないか」と。それに目覚めていきなさい。それを摂取不捨と言うのであって、『大経』の本願に救われた救いを『観経』に説かれている人間の課題からすると摂取不捨と言うのですよと。

『阿弥陀経』はお互いに喧嘩をして戦争をする、まあそこまでいなくても、好きな人と嫌いな人とあるでしょう。そして喧嘩するでしょう、しょうもないことで。それが大きな仏さまの大悲に救われてみれば、みんな私を後ろから護ってくれていたと。諸仏護念。敵だと思っていた人がよく考えると自分

を仏教に向かわせてくれていた。だから今はどんな人も諸仏として仰ぎます。これが諸仏護念。『阿弥陀経』ですね。それは本願の成就、『大経』の本願の成就というところに立って『観経』を読めば、『観経』が持っている人間の課題にとって撰取不捨と言います。

それから『阿弥陀経』が持っている人間の課題から言えば諸仏護念と言います。それは全部『観経』に救いがあるのじゃない、『阿弥陀経』に救いがあるのじゃない、救いは本願の救いしかない。「かの仏願に順ずるがゆえに」と法然も言っているのだから。善導大師も言っているのだから。そこを間違えないようにしないといけないというふうに思います。

間違いなんでしょう。全部そうなりますから。善導大師でも『大経』の救いに立って『観経』の表向きの意味を明らかにしてくださっている。だから善導大師という人はまた偉い人です。これは。

質問者1・ありがとうございます。『観経』と『大経』を少しわからせていただきました。ありがとうございました。

先生・今申し上げたことは大事なことです。他に何かあったら何でもいいですよ。

質問者2・すみません、帰ってもう一遍勉強しなければわからないのですが、「必ず真実心の中(うち)に作(な)したまえるを須(もち)いることを明かさん」(東聖典215頁、西216、島12-59)って、「須(すべから)く何々すべし」って言うんですけど、ここを

先生・「須らく作(な)すべし」。本当は「べし」で終わるのです。だけど後ろに続いているから「作すべきことを明かさん」。お釈迦様がそう教えようとして至誠心を説いてくださったのだと、こういう文章になります。

質問者2・「須(もち)いる」という意味は、「須(すべから)く何々すべし」って言うことですか。何かこのところを理解できてないものですか。

先生・もともとこの、「須(すべから)く」という字は漢文のルールですと、ほとんどの場合、ほとんどの場合と言うか、普通の場合は「須(すべから)く何々すべし」と言うのだと。ですからここでは「必ず須(すべから)く真実心の中に作(な)すべし」。「須(すべから)く何々すべし」。こう読むわけです。これが普通の読み方。

質問者2・「須(すべから)く」という意味は何ですかねえ。

先生・必ずその真実心をちゃんとやりなさいよと。こういう意味になります。「須(すべから)く何々すべし」。わかりますね。「必ず真実心を須(もち)いて、生きていきなさいよ」。こういう意味になります。

それを親鸞聖人は「須(もち)いる」というふうに全部読んでいるということ。これはちょっと特殊な読み方で、絶対にそう読まないとは言えない。漢文は随分、どう言ったらいいか、読み方によってルールは一応ありますけれども、その読み方によっていろいろありますから、全く間違いではないけれども、普通の場合は何ぼ言っても「須(すべから)く何々すべし」と読むのが普通です。それを親鸞聖人は、この三心釈に限っては全部「須(もち)いる」と読んで、法蔵菩薩の真実を須(もち)いるんですけど、こういう意味に読み替えてしまった。この辺に親鸞聖人の読み替えの大切さがありますので、帰ってまあ、読んでみてください。

質問者3・先生すみません。その「須(もち)いる」というのを、そこで法蔵菩薩のご苦勞を頂きなさいってというような形で、そういうふうに了解したらいいですか。

先生・そうです。この前後の文章から言うとね、「私たちは外側に立派な姿を現すことはできない。内面にいつも虚仮を懐いているからです」と。親鸞聖人の場合は、なぜ真実を須(もち)いるかということ、こういう実相だからですというふうに文章を読み替えているわけです。だからそういうことから言うと、親鸞聖人の場合は外に立派な姿をすることはできませんと。内に煩惱を抱えてどうにもならん奴だから、だから法蔵菩薩の真実心の中に作(な)すべきことを須(もち)いなさいと教えるためにお釈迦様が「至誠心」と一番最初に説いてくださったのですと、こう読んだわけです。それでいいですか。そう読んでいるから、まあ帰って一回よく見てください。

だからその辺に、あのね、みなさんも気が付いて「この読み方、ああそういうことか」と思うでしょう。そして参考書を読んでごらん、読み替えてるところまでは書いています。なぜかという理由は書いていません。誰も。それは今言ったように、本願に救われたという『大経』の立場から『観経』を読み替えているからこうなる。

善導大師はおっしゃるように本願に救われているけども、『観経』の「願の義」が大事だから、それを明らかにするために「願の義」を明らかにしているのが善導大師だと、こんなふうに考えてください。いいですかね。

もちろん七祖は全員救われているのは本願の救いですよ。その辺に、どう言ったらいいか、今までの勉強する人たちがね、『観経』に救いがあるかのごとくに言うから、『阿弥陀経』に救いがあるかのごとくに言うからね、確かにさっき言ったように、救いの名前はあります。それは『観経』に説かれている人間の課題からすると、撰取不捨と言うわけです。

『大経』に説かれている人間の課題からすると、みなさんご存知でしょう、『論註』の「清浄功德」に人間は尺取り虫のようだ。それから蚕(かいこ)のようだ。自我ばかり立てて自我を生きてゆく。そういうところに、人間が何をしたいかということがわからなくなっている。今の現状です。世界の現状から言うと、人間の問題はニヒリズムです。ニヒリズムというのは、何をしたいかわからない。それが世界の問題ですね。

その問題に対して『大経』は本願の成就と説くわけです。つまり、いのちの底からやりたいことが見つかったと考えてもいい。いのちを捨ててもいいと書いている、「恩徳讃」に。この人間のいのちなんかいつ捨ててもいいんだと。無量寿のいのちを生きること。それが世界中の人を救うことになるし、戦争も救うことになるのだと。だから無量寿のいのちに生きること。それ以外に救いはないのだと。

何をしたいかわからない、何にいのちをかけていいかわからないで、「人を殺してみたかった」とか、訳のわからないことばかりする。それは実は無量寿のいのちを生きることがわからないから。無量寿のいのちがわかると、本当にやりたいことが見つかる。そこに俺のいのちは捨ててもいいと、無量寿のいのちをみんなに伝えていこうと。これが本願の成就です。

ですから本願の成就というと、法蔵菩薩のように仏法をあらゆる人に伝えていきたい。それが『大経』の本願の成就という意味です。

『観経』の撰取不捨というのは孤独を救うという意味です。『阿弥陀経』の諸仏護念というのは人間の関係が回復するという意味です。それによって人間が本当の人間になるのだというのが『大経』『観経』『阿弥陀経』でちゃんと押さえられているということになります。それは全部本願の救いだということになります。

僕はどこも違ったことを言ってますよ。親鸞聖人がおっしゃっている通りです。

質問者4・すみません。簡単なことなんですけど、文章の読み替え自体が、親鸞聖人の求道の足跡みたい

な感じかなと思ったのですけど。

先生…まあそれはそうだと思いますよ。まあそういうことから言えば、比叡山の20年は『観経』の定善観。覚りを求めて一生懸命頑張ったんでしょね。ところがそれが求められずに娑婆に下りてきた。それは定善ではもう救われない。娑婆に下りてきたということは、今度は娑婆に戻るとのことやから、もう娑婆に戻ってしまうと元の木阿弥やし、このまんまで救われる道はないかといって六角堂に籠ったそうすね。そのときに救世観音が出て来て、「私が玉のような女性になってあなたに仕えます」と。「そして夫婦生活をしながらいのち終わるときに必ず浄土に導きます」と。こういう夢を見た。

そうすると、在家のままで救われる道がある。それを説いていたのが法然ですから、だから六角堂に籠って、法然の所に行くべきかどうか悩んでいたのだらうと思う。それが解けたと。あの夢でね。凶と出るか邪と出るかわからん。けど行くしかない。そこしか。だから法然のところに行った。そして法然のところに行って「**いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし**」(『歎異抄』第二章、東聖典627頁、西833、島23-2)。初めて凡夫になった。その時に、かねて比叡山で学んでいた『大経』の本願が私を貫いたんだと、こう言っているわけです。

そうすると、まあこの読み替えは『観経』から『大経』へという展開を踏まえて、こういうふうに見替えたというふうに見れば、おっしゃっていることは間違いではないというふうに思います。

実は七祖の方々は、ほとんど今言った道筋を通して、つまり自分の努力、それから聖道門の苦勞、そういうことを通して死ぬような思いをしながら、みんな本願に帰って行った。だから『観経』の定善の覚りを求めていたところから始まって、ついに善導大師が言う凡夫の所に帰って行った。そういう道筋でほとんどの人たちが浄土教に帰依していますから、善導大師一人じゃなくて、親鸞聖人一人じゃなくて、全部がそういう道を通っているというふうに考えて間違いはないと思います。

質問者5…先生よろしいですか。えっと、私が質問したらいつもとんでもないことだから、先生が、あつこの程度に聞いとったんか、残念やったなああって先生に言われそうで、

先生…いやいや、大丈夫です。

質問者5…頭と彰という言葉がなんか今日印象に残りました。会座に出るといことは、先生のお言葉を聞くという事は「頭」かなあとと思います。そして「彰」というのは、聞くことによって仏さまの心をどこかで頂くのか、先生の心の中の見えないものを頂くのかなあと。

先生…彰というのは明らかにするという意味ですから、そういう意味でしょうね。

質問者5…それで、その力というのはやっぱり仏さまの力かな。彰を明らかに頂くっていうところは、そんな変なことを思いました。ありがとうございました。

先生…いえいえ、全然変じゃありません。あの、大きく言えばそういうことじゃないでしょうか。そして私たちが「あつそうか」とわかるのは、必ずそういう道を通るといこと。最初は自分の外に仏さまを見えています。だから西の方にあると説いている。『観経』では、だから自分の外に仏さまがあつて、西の方から救ってくれると説いている。ところがそれを求めても求めてもどうしても救われない。ということを通して初めて今度は自分の中から阿弥陀が名乗り出た。「南無阿弥陀仏」と名乗り出た。これが『大経』ですから。

だからみんな今言ったような道筋を通して仏教がわかるのだと思いますから、おっしゃっていることは全然間違っていない。他に何かありますか。

田畑先生…岡田先生お願いします。

質問者6…やっぱり何かお聞きしたいことがあつてですね、おたずねします。さっきニヒリズムというものについてお話がありました。私自身もニヒリズムと取っ組み合いをして生きて来た。随分それと戦ってきたわけですが、それで救われたと思つたのですけども、ふと気が付くとニヒリスティックな自分に返っている瞬間があるんですね。で、これは非常に気分的なものではなくて、非常に大きな本質であるように私には思えてしょうがないんですね。

こういう問題に対してどういう姿勢を取ればよろしいでしょうか。

先生…はい。『大経』は「一心帰命」と「願生浄土」という、二つに分かれていると私がよく言いますね。「願生浄土」のところでは、今岡田先生がおっしゃったように、せっかく仏教に帰依したのに念仏生活を振り返ってみると、いつの間にかニヒリズムに沈んでいる。そして気が付いたら人の悪口言うて、金の計算しかしていないと。娑婆をどこも出ていない、これはどういうことやというふう悩んでいく。それが「願生浄土」と言うときに私たちの問題となることですから、単に岡田先生の感情の問題ではなくて、必ず仏教を歩むというときにはそういう問題にぶつかる。

だから、例えば『歎異抄』では唯円がせっかく念仏に目覚めたのに

「踊躍歎喜(ゆやくかんぎ)のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」

(東聖典629頁、西836、島23-4)

とこう問うた。そうすると親鸞聖人が「その通り」、「親鸞もこの不審ありつるに」、「煩惱の所為なり」。あれが恐ろしいところです。「その通りだ、それは煩惱の所為だ」と。「そういう生活を通して益々凡夫に帰れ」と。そして「凡夫であるということを忘れるな」と。そこに帰ったら

「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」。

そういうことを通して、改めて「本願に立ち帰りなさい」。こう説いている。だから煩惱によってニヒリズムの心が起こって来ることについては、それは誰でも起こることだから、起こって来たらあかんとは言わん。あかんとは言わんけどその時に、「煩惱の所為なり」と言つて、だからこそ南無阿弥陀仏がいったんだ(必要だ、あるのだ)というふうには、「念仏の教えに帰って行きなさい」と親鸞聖人が言つてますから、僕じゃないよ、親鸞聖人が言つてますからそのようにしてください。と思います。そうやろう、親鸞聖人はそう言つてるね。

改めて煩惱の身であるということは何度も知らされるわけよ。だから「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」と、本願に帰りなさい、改めて帰って行きなさい、そして念仏によって超えて行きなさいと、こう親鸞聖人は教えてくださっていますから、その通りのことを申し上げただけのことです。

田畑先生…はい、どうもありがとうございました。2、3分早いのですけども、一応これで今日の会は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。先生どうもありがとうございました。

先生…いやいや、また生きとつたら来年会いましょうね(笑)。お元気で。ありがとうございました。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏 (恩徳讃、終了)

【テープ起こし】: 都瑠仙一さん、江本真人さん、田中志津子さん、伊藤育代さん、熊谷明美さん、住職

【添削】: 田畑正久先生、住職